



〔図1〕旧表紙

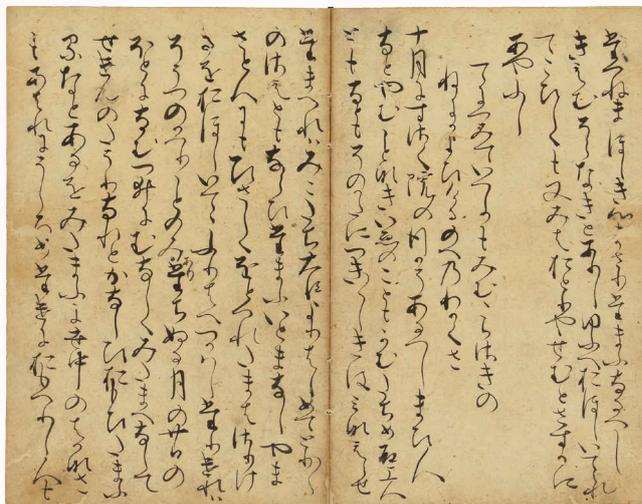
平安時代、紫式部によって著された源氏物語は、その成立以来写本や版本によって伝えられ、今なお読み継がれている。残念ながら紫式部の手がけた原本は残っておらず、国宝「源氏物語絵巻」の絵巻の詞書という特殊な形の本文を除けば、鎌倉時代以降に書写されたものしか伝存せず、藤原定家(1162-1241)が監修、校訂した定家本、いわゆる青表紙本もその一つとされる。

鎌倉時代の歌人である定家は、古典の書写、校訂による証本の作成、注釈にも携っていた。源氏物語においても、本文を書写する過程で当時すでに写し間違いなどが多く、正確な元の形がわからなくなっていたため、定家はより正しい本文を追求しようと試み、家中の少女等に源氏物語を書写させていたことは『明月記』の嘉禄元年(1225)二月十六日条「自去年十一月、以家中小女等、令書源氏物語五十四帖、昨日表紙訖、今日書外題、(後略)」に確認できる。

表紙に青色の料紙を用いたことから青表紙本とも呼ばれ、今日読まれる源氏物語の本文の基準にもなっている定家本は、これまで「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」の4帖のみが確認されており、いずれも国の重要文化財に指定されている。

そして源氏と紫の上の出会いを描く「若紫」帖が一昨年、三河吉田藩主家大河内家より発見され、大きな話題を呼んだ。本文は定家本系統の大島本とほぼ一致し、定家本の特徴である『源氏釈』等の注釈を巻末に記した「奥入」が確認でき、貴族が用いる青墨による書き込み(40丁表5行目の補入「○あり」)や、63丁裏「奥入」の「ゆほひか」の、「のへ」の上に書かれた「水」が定家の校訂と想定されることなどから定家本と認められている。また伝来については、明治6年(1873)の大河内家の所蔵目録「豊橋御道具記」乾冊に記され、寛保3年(1743)に福岡藩主黒田継高つぐたかから当時老中を務めていた大河内松平家の松平信祝のぶときに譲渡されたことがわかっている。

(助教 谷嶋美和乃)



〔図2〕(右)39丁裏 (左)40丁表

写真提供：八木書店出版部

学習院大学史料館からのお知らせ

令和3年度学習院大学史料館秋季特別展 「ボンボニエールが紡ぐ物語」

【主催】学習院大学史料館

【共催】一般社団法人 霞会館

【協力】学習院大学文学部日本語日本文学科

【会期】令和3年9月13日(月)～12月3日(金)

開室：月～金曜 12:00～15:00

閉室：土・日曜、祝日

*9月中は11:00～、祝日(20・23日)も特別開室。

*新型コロナウイルスの感染状況によっては変更する場合があります。最新の情報は史料館のホームページをご覧ください。

【会場】学習院大学史料館展示室(学習院大学 北2号館1階)

*入場無料

【関連講座】第93回学習院大学史料館講座

《対談》「物語の玉手箱 ボンボニエール」

橋本麻里氏(永青文庫副館長)×長佐古美奈子(当館学芸員)

※WEB上にて10月より配信予定

もっと詳しくお知りになりたい方は

長佐古美奈子 | 紡ぐプロジェクト(yomiuri.co.jp)をご覧ください。

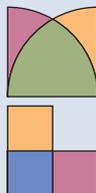
ミュージアム・レター第46号

令和3年(2021)9月1日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(5992)1173

FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History
学習院大学史料館

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>